

チャレンジ！！オープンガバナンス 2019 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注1)	No.	タイトル	自治体名
	13_1/1_1	地域の問題を発見し、解決に挑戦する担い手づくり～住み慣れた地域で暮らし続けるために～	滋賀県 近江八幡市
アイデア名(注2) (公開)	住民意識調査で未来を創造「mirai ラボ」		

(注1) 地域課題タイトルは、COG2019 サイトの中に記載してあるエントリー自治体(連合)が掲げる地域課題を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームが応募されるアイデアにつけるものです。アイデアにふさわしい名前を付けてください。

1. 応募者情報

チーム名(公開)	安土学区まちづくり協議会 地域振興部会「mirai ラボ」		
チーム属性(公開)	<input type="radio"/> 1. 市民によるチーム <input type="radio"/> 2. 学生によるチーム <input type="radio"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム		
メンバー数(公開)	5名		
代表者情報	氏名(公開)	的場保典	
メンバー情報			

(注意書き) ※ 必ず応募前にご一読ください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2019_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2019 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2019@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
 - 「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示-非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。
 - (具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
5. この応募内容のうち、「3. 自治体との連携」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様でお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。)

2. アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容、(2) アイデアの理由、(3) 実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

(1) アイデアの内容（公開）

アイデアは、課題解決のために、何をやる社会的なサービス（活動）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したり、活用したくなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなわくわく感のあるアイデアを期待します。2 ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題>

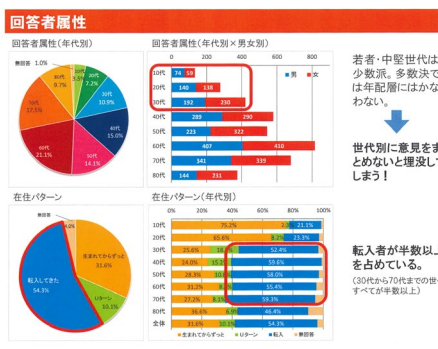
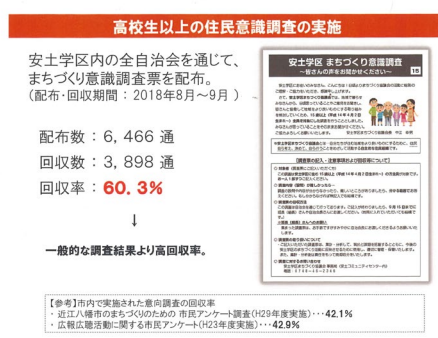
地域の問題を発見し、解決に挑戦する担い手づくり

安土学区で昨年度実施した住民意識調査で見えてきた課題に挑戦

<解決アイデアの内容>

「地域の課題を研究・実験する mirai ラボの設置」

昨年度、安土学区まちづくり協議会（以下、まち協）では学区内の 15 歳（高校生）以上のすべての在住者（自治会所属に限る）を対象に住民意識調査を実施した。配布数 6,406 通に対し回収数 3,898 通と回収率 60.3%と半数以上の協力を得て報告書にまとめた。



アンケートの結果として問題の傾向が多く見えてきたが、問題の本質や本当に住民が困っていること・解決しなければいけない課題までは見えていない。

そこで、まち協では意識調査の結果を広く住民に知らせるために報告会の開催場所の募集と課題解決を目的にラボ員の募集を行い周知とチーム作りに取り組むことから始める。

課題解決を考えるうえで、まち協 地域振興部会 からも数名参加し多方面からの意見を求めることとする。

募集したラボ員と地域振興部会員とで、「mirai ラボ」を設置し、次ページのように課題解決に取り組むこととした。

1. 目的

私たちの地域の課題について、解決にむけた手法を《研究》し、それを《実践》することを通して、私たちが暮らしやすい地域の《未来》づくりに挑戦する

=mirai ラボ ※ラボ=laboratory ; 実験室・研究室

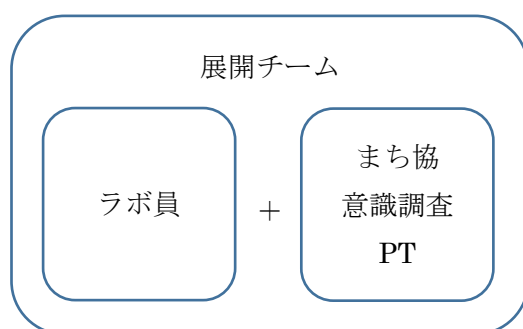
2. 活動

(1) 上記の目的の実現に向けた手法(政策)の立案

(2) (1)の実践または実験

(3) (2)の展開(町内へ)及び普及啓発

3. 体制



	ラボ員	意識調査 PT
対象	公募。オープン	まち協地域振興部会（自治会から選出）から選出
人数	制限なし	10名程度
任期	なし（出入り任意）	1年交代

4. 進め方

- まず《目標》を設定し、次に目標達成に向けた《手段》を検討する
- 目標の設定にあたっては、【意識調査】をベースとする

具体的には、

- (1) 【意識調査】で示された様々な問題について、より具体的に分析する
- (2) (1)の分析を踏まえ、展開チームとして取組む課題を絞り込む
- (3) (2)で絞り込んだ課題の背景、解決に向けた要因・障壁が何かを特定する
- (4) (3)で特定した要因を解決する手法(アイデア)を構想する

※(1)~(4)を展開チームが中心となって、ワークショップ形式等で検討する

オープン化した地域のデータ (=意識調査) を元に、市民の自主的な活動により課題解決をしていく「仕組み」を「mirai ラボ」として設置する。

(2) アイデアの理由 (公開)

このアイデアを提案する理由について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ2ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類の数値データやアンケート・インタビューなどの資料や関連の計画、既存の施策などの定性データのことを総称します。データは出所を明らかにしてください。

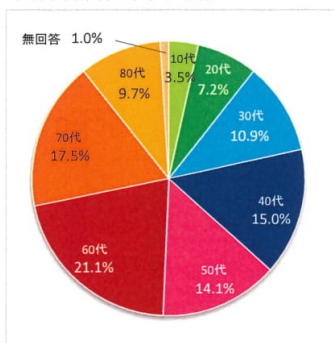
意識調査の結果により在住者の半数以上は転入者という結果がみえてきた。

これは今まで明確になっておらず、地元住民から驚きの声が上がっている。

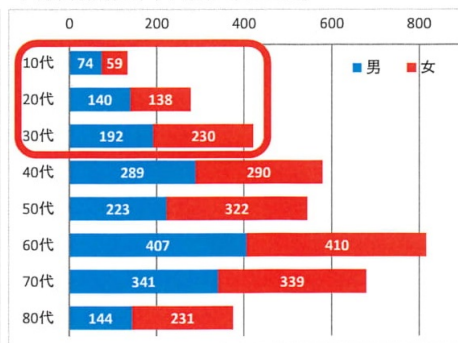
現状まちづくり協議会に関わる人たちは地元住民・高齢の方が多く、転入者・若手の意見が反映されていない。

回答者属性

回答者属性(年代別)



回答者属性(年代別×男女別)

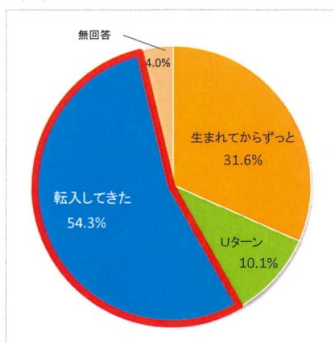


若者・中堅世代は少数派。多数決では年配層にはかなわない。

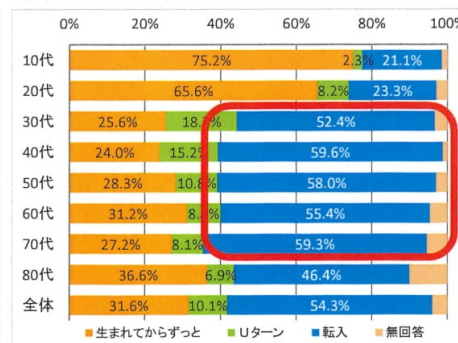


世代別に意見をまとめないと埋没してしまう!

在住パターン



在住パターン(年代別)



転入者が半数以上を占めている。

(30代から70代までの世代すべてが半数以上)

そこで、今回の「mirai ラボ」では参加していただく方を広く公募してまちづくりに関心のある性別・世代に関係なく募集することで今まで反映されていなかった意見を拾いお越し、課題を深掘りし・本質を見つけ、解決のアイデアを出すことに取り組むこととした。

上記公募以外にもまち協 地域振興部会には自治会から「まちづくり推進委員」として所属している。「まちづくり推進委員」はいわゆるあて職の方たちにも「意識調査 PT」として参加してもらい、新たなまちづくりの実践者づくりに取り組むこととする。

意識調査の実施とそれにより見えるかされた地域の困りごと (=問題) を解決する仕組みを地域住民の力で実践することが必要となった。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法、アイデアの実現にいたる時間軸を含むプロセス、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、アイデア実現までの大まかな流れについて、2 ページ以内でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

意識調査を元とした報告会の実施

自治会の代表者が集まる自治連合会や民生委員・児童委員、町内会のサロンなど5回開催をした。意見としては行政・まち協への要望が多くを占め、自主的なまちづくりの意見は少なかった。

「mirai ラボ」

チームメンバーと進め方から検討を行い、

- (1) 【意識調査】で示された様々な問題について、より具体的に分析する
- (2) (1)の分析を踏まえ、展開チームとして取り組む課題を絞り込む
- (3) (2)で絞り込んだ課題の背景、解決に向けた要因・障壁が何かを特定する
- (4) (3)で特定した要因を解決する手法(アイデア)を構想する

※(1)～(4)を展開チームが中心となって、ワークショップ形式等で検討する
で、取り組むこととしてラボミーティングを開催することとした。

公募したラボ員への応募は8名で中学生からの応募もあり世代性別とも多彩な応募があった。

ラボミーティングを開催する前に、チームメンバー＋ラボ員に応募いただいた方と「mirai ラボ」の目的・進め方の説明し意見をいただき共有を行った。

その後、取り組む課題の絞り込みを行い「自治会と地域活動について」をテーマとすることとなった。

ラボ員との会議を元に、9/7 第1回 ラボミーティングを開催した。

当日は、ラボ員 7名、意識調査 PT 6名、チームメンバー 5名の参加があった。

会は「mirai ラボ」目的・進め方の共有からはじまり、「自治会と地域活動について」具体的に何が課題となっているのか、課題の洗い出しを行った。

出た意見としては、こどもについて・自治会役員・伝統行事・防災防犯・空き家等の意見がでた。

多くの意見の中から、「行事が大変」・「役のなり手が少ない」の二つに分かれて原因の追究をグループワークで実施した。

「行事が大変」…行事自体が多い。日程確保が難しい。参加人数が集まらない、実行人数が少ない。企画段取りが大変。コミュニケーション。

「役のなり手が少ない」…あて職。役員の仕事が多い。昔ながらの仕組みが残っている。高齢化のためなり手がいない。集金が大変。面倒なイメージ、親の影響。情報不足。消防。民生委員。

等の原因が多くで、第一回 ラボミーティングは終了した。

ミーティングには行政から3名オブザーバーとして参加があった。

10/19 に、第 2 回 ラボミーティングを開催した。

当日は、ラボ員 3 名、意識調査 PT 5 名、チームメンバー 5 名の参加があった。

前回の振り返り、「原因の共有・絞り込み」、「絞り込んだ課題解決のアイデア出し」を行った。

「行事が大変」のグループでは、「企画・段取りが大変」に絞り込み、LINE など SNS での情報共有やマニュアルを作るなど具体的なアイデアが出た。

「役のなり手が少ない」のグループでは、「役員の仕事が多い」「住民や役についての情報が不足している」に絞り込み、組織・体制の見直し複数行事をまとめて行うや、上記同様の引継書（マニュアル）を作るなどのアイデアが出た。

今回はここまでの実践しか行えていないが、

今後、出てきたアイデアを実現に向けたテストの実施・モデル地域での実験・実験結果のフィードバックを繰り返し行うことで市民が自主的な活動により課題解決の手法を実践していく仕組みを目指す。

こららラボの活動は、まち協及び学区内自治会等との連携により行う。

